

解説

森 晋太郎

ムスタファー・タージュッディーン・ムーサーは一九八一年、シリア北西部のイドリブに生まれた。ダマスカス大学情報学部で学び、舞台俳優として活動を始めた後、一九九八年に最初の短編小説を発表し、これまでに作品集四冊を刊行している。

シリアでは二〇一一年、「アラブの春」の機運が高まる中で民衆の蜂起が始まった。しかし、平和的なデモに対するアサド体制の苛烈な弾圧は反体制運動の武装化とイスラム主義過激派の台頭を招き、混乱に乗じて所謂「イスラム国」が勢力を拡大。その残酷な振る舞いが世界の耳目を集める中、体制は「テロとの戦い」の名の下に、国際社会の実質的な黙認とロシアやイランなどの支援を得て、自国民に対する殺戮を続ける。膨大な数の人々が命を落とし、傷つき、家を失い、故郷を逃れ、未曾有の混乱の中で文字通り塗炭の苦しみを強いられている。

こうした激動の中でムスタファーは、二〇一四年まで故郷のイドリブを拠点として、

インターネット上に作品を発表するなどの営みが続けていたが、当局の呼び出しや嫌がらせが度重なり、ついには反体制派武装組織の助けで国外に脱出し、現在はトルコ南東部に暮らしているという。

二〇一一年以前の彼の作品群は最初の短編集『三人の絵描きの湿った地下室』に所収。シリアの人々の何気ない日常の光景を題材にとったものが多くて、ユーモアと哀感を湛えた筆致や洒落な言葉のセンス、人間に対する愛情が印象的だ。演劇や映画を愛する作家ならではの視覚的なイメージも魅力の一つだと思う。

今回翻訳した短編は、いずれも二〇一三年にインターネット上に発表されたもので、シリアの現在の状況を色濃く反映している。

「なんていい人たち」では、治安機関に逮捕された主人公語り手が、獄中での虐待や拷問を、まるで有り難いことや楽しいことであるかのように無邪気に描写する。その倒錯した姿を、天井の小窓から射し込む月明かりがまざまざと悲しく浮かび上がらせる。

「偉大なる計画」では、爆撃と包囲と虐殺の恐怖という絶望的な状況の中に置かれた主人公が、現代の方舟たるドラム缶（言ってみてもなく、政府軍が使用している樽爆弾を連想させる）に子供たちを乗せて、宇宙のどこかにジャスミンの香るシリアをよみがえらせるといふ計画を立

てる。自分をノアや神そのものになぞらえて、新しい世界の創造者として崇拜されることを夢見ながら、少年に対して居丈高に振る舞う主人公の姿は、権威主義を体現して愚かしい。計画の成功に沸き立つ歓喜と栄光のさなかに、頭上から落ちてくるドラム缶。その後に残されるのは、再び始まる絶望の日々と、心だけ別の惑星に飛んで行ってしまった少年の姿だ。

戯画的に描かれた不条理の世界には、内戦の渦中にある人々の日常を取り巻く紛れもない現実が凝縮している。ムスタファーの持ち味である飄々としたユーモアの感覚や人間への愛情がここでも発揮されていることによって、却って状況の異常さや恐ろしさが際立つと同時に、愚かしくも愛らしい主人公たちのささやかな夢や願望が切なく胸に迫ってくる。

バンドラの匣はなが開かれたかのように剥き出しの暴力が吹き荒れる今日、短編小説を執筆するという営みについて、ムスタファーはあるインタビューの中で、「地下の独房の壁に太陽の絵を描く囚人のようなもの」だという苦い認識を吐露している。

確かに現在のシリアは、明るい夢を抱くにはあまりにも絶望的な状況であるかも知れない。しかし、そうであればこそ、止むに止まれず自由を希求する人々が、太陽の落書きを続々と生み出してゆくことになるのだろう。